

## 日本語の時間指示表現における近接性と格助詞

中村 ちどり

東北大学大学院国際文化研究科

e-mail: chidori@intcul.tohoku.ac.jp

日本語の時間指示表現においては、「あした、行きます」のように、時間が直示表現によって表される場合、格助詞‘に’が生起しない。このことから、先行研究においては、時間名詞の相対的な性格が‘に’の生起を妨げているとされてきた。

しかし、本研究では、遠隔直示表現の‘に’との共起、新聞、日記等での近接表現における‘に’の非生起という現象を考察し、‘に’の生起を妨げる要因が名詞の相対性ではなく、“今への近接性”であることを示す。そして、この近接性が“時間幅”の認識に関わり、近接直示表現等において‘に’の生起を妨げていることを示すと共に、非直示的表現における‘に’の生起を、時間幅の観点から説明する。

### 1. はじめに

日本語の時間名詞は、時間量(‘1時間’‘3か月’など)を表したり、相対的な時間(‘今’‘来月’など)を指示する場合には、格助詞‘に’を伴わずに副詞的に用いられる。これらは、“時詞”と呼ばれ〔吉沢1950, 佐治1991〕、数詞との関連で研究されてきたが、ここではこのうちの時間を指示する表現について、‘に’の生起とその要因を考察する。

時間指示表現における‘に’の生起を妨げる要因については、直示表現(相対的な時点の表現)が‘に’を伴わないことから、これまでの先行研究においては、時間名詞の持つ相対的な性格が‘に’の生起を妨げているとされてきた〔佐治1991, 益岡・田窪1992〕。また、直示以外の“絶対的な表現”(絶対的な時点の表現‘2月’など)は‘に’と共起しなければならないが、文頭にあってその時点に何が起こったかを述べる場合には、‘に’を伴わずに現れるとされている〔益岡・田窪1992〕。

#### a. 直示表現

- (1) ここで きょう / \*きょうに 事故がありました。
- (2) きょう / \*きょうに ここで 事故がありました。

#### b. 絶対的な表現

- (3) ここで \*3時 / 3時に 事故がありました。
- (4) 3時 / 3時に ここで 事故がありました。

しかし、以下の文における‘に’の生起は、この規則の例外となるものである。

- (5) 一昨年に発表された新農政は、将来日本農業の担い手となるべき農家に施策を集中、という思い切った構想を打ち出した。

〔朝日新聞, 1994.11.3, 論壇〕

- (6) 「このあいだ言ってたディズニーランドの件だけど、しあさってに行かない？」

(5)では‘一昨年’、(6)では‘しあさって’という直示表現が、‘に’と共起している。直示表現は、どのような場合に‘に’と共起可能であるのか。以下2章で、‘に’の生起条件を考察する。

### 2. ‘に’の生起と“今への近接性”

直示表現と‘に’の共起をみるために、「      に行きます/ました。」「      にここにいます/ました。」という文を考える。表1に見るように、遠隔の直示表現が容易に‘に’をとることができるのに対し、

<遠隔>	——	<近接>	—	(現在)	—	<近接>	——	<遠隔>
	ゆうべ	けさ	今	こんや	今朝に			
さきおとといに	おとといに	きのう	きょう	あした	あさつてに	しあさつてに		
	—昨日に	昨日	本日	明日(に)	明後日に			
	先々週に	先週	今週	来週(に)	再来週に			
	先々月に	先月に	今月	来月(に)	再来月に			
	おとしに	去年	今年	来年(に)	再来年に			
	—昨年に	昨年	本年	明年(に)	明後年に			

表1. 直示表現と‘に’の生起

近接の表現は、現在に近いほど‘に’と共に起しにくい。したがって、直示表現において‘に’の生起を妨げている要因は、名詞の相対性ではなく、“今への近接性”だと言える。

また、‘に’の生起が文中で義務的、文頭で自由とされている絶対的な表現においても、近接の場合は‘に’がつかない。

(7)厚生省は十五日、被爆者援護法案の要綱をまとめた。 [朝日新聞 1994.11.6]

(8)3月5日 (‘に’)、映画を見た。  
[3月5日の日記]

(7)の‘十五日’は新聞記者にとっての現在、(8)の‘5日’は日記の筆者にとっての現在であり、これらの語が示す“今への近接性”が、‘に’の生起を妨げていると考えられる。

### 3. “時間幅”と‘に’

時間名詞の持つ意味素性として、“位置”と“時間幅(duration)”を考え、このうちの時間幅をみると、「会議は三日(‘に’)続きます。」のように、時間名詞が動詞の目的語として時間幅のみを表す場合、‘に’は生起できない。佐治 [1991] には、相対的な名詞の持つ“長さ”が‘に’の点性と合わないという指摘があるが、近接の時間直示においては、時間幅が相対的に長く認識されてお

り、それが‘に’の生起を妨げていると考えることができる。時間認識と時間幅の関係が図1のようなものであれば、近接直示のみが幅の認識を伴うことを説明できる。

また、‘今’‘今日’など“現在”の概念を含む近接直示は、現在だけでなく必然的に近接の過去と未来も含むため、時間概念が豊富であり、そのために幅を持って認識されているとも言える。

(9) 今 おこなう。(未来)

(10) 今 おこなっている。(現在)

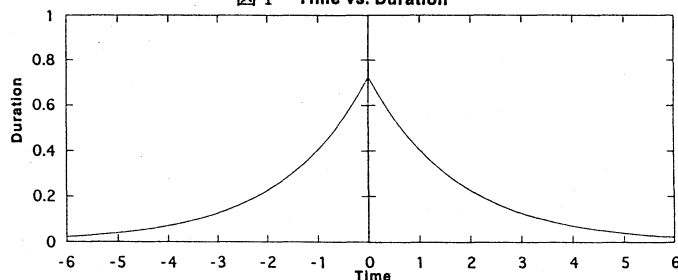
(11) 今 おこなった/おこなっていた。(過去)

### 4. 近接直示以外の時間名詞と‘に’の生起

近接の直示表現以外の時間名詞においては、‘に’の生起が可能であるわけだが、これらの名詞においても、時間幅と近接性の認識が伴う場合、‘に’が生起しない傾向がある。

まず、述語の持つ時間幅を考慮するために、述語を動作述語(動作・作用を表す動詞; ‘見る’ ‘散る’ など)と、状態述語(存在動詞、形容詞、動詞のテ

図1 Time vs. Duration



イル形; ‘ある’ ‘涼しい’ ‘読んでいる’ など)に分ける。そして、述語の時間幅と ‘に’ 生起の関係をみてみると、時間幅の短い動作述語において ‘に’ の生起が自然であるのに対し、時間幅の長い状態述語の場合は ‘に’ が無いほうが自然である。

- (12) 15日に 来ました。 (動作述語)  
(13) 15日に 寝ていました。 (状態述語)  
(14) 15日に 風が強かったですね。 (状態述語)  
(15) 夜に 会いました。 (動作述語)  
(16) 夜に 話していました。 (状態述語)  
(17) 夜に 月がきれいでした。 (状態述語)

これらの表現においては、文が示す事態の時間幅が、述語によって表現されており、時間幅が相対的に長いことが、‘に’ の生起を妨げる要因になっている。

また、小説などの語りの文では、‘に’ の非生起が、動詞の現在形(歴史的現在)や近接の空間直示‘こ’と同種の文体的効果を持つ。過去の出来事を現在形で表現したり、近くにないものを「この男が～」のように近接の指示詞で表現することで、視点の移動による臨場感が生まれることは、“empathetic deixis” [Lyons1977, Levinson1983]、“感情移入のコ” [吉本1992] などとして指摘されているが、このような効果を ‘に’ の非生起にも見ることができ

- (18) 午前六時である。朝風呂を浴び、新聞に眼をとおし、おかゆの食事をとる—この五月十八日、鈴木善幸首相にとって、べつに変わったところはなかった。

[戸川猪佐武「小説永田町の争闘」]

- (19) 久しぶりに、部屋の掃除にとりかかりました。日曜日の午後、えいやっと覚悟をきめて、木綿の手袋いわゆる軍手というやつですが、それをはめて大掃除にかかります。

[五木寛之「生きるヒント」]

これらの時間指示表現に ‘に’ をつけると臨場感が失われることから、ここでの ‘に’ の非生起は、感情移入の効果を高める働きを持っていると言える。これは、‘に’ の非生起によってもたらされる時間幅

の存在と近接性の認識が、視点移動と臨場感という効果を作りだしているためと考えられる。

## 5. おわりに

本稿では、近接性と時間幅の認識という観点から、時間指示表現における格助詞 ‘に’ の非生起を説明した。今後は、本考察で得られた ‘に’ の生起条件をもとに、時間指示句と文の項構造の関係を考察し、時間名詞の副詞的用法・名詞的用法を統合した形で、時間表示のメカニズムを考えていく。

## 謝辞

本研究は文部省科学研究費補助金重点領域研究(2)「日英語対話文における時間の直示と照応表現に関する対照的研究」(No.06232211)による研究成果の一部である。

## 参考文献

- [1] 吉沢義則(1950)『日本文法理論篇』. 教育タイムス社.
- [2] 佐治圭三(1991)「時詞と数量詞—その副詞的用法を中心として」『日本語の文法の研究』. ひつじ書房. pp.265-279.
- [3] 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』. くろしお出版.
- [4] 吉本啓(1992)「日本語指示詞コソアの体系」. 金水敏・田窪行則編「指示詞」. ひつじ書房. pp.105-122.
- [5] Fillmore, C.J. (1975) Santa Cruz Lectures on Deixis 1971. Indiana University Linguistics Club.
- [6] Lyons, J. (1977) Semantics, vol.2. Cambridge: Cambridge University Press
- [7] Levinson, S.C. (1983) Pragmatics. Cambridge: Cambridge University Press

